寄稿

『親鸞 左訓・字訓・語訓辞典』

聖人の用語理解を知る

編者・仁愛大学学長　田代俊孝

コロナ禍を機に編纂

親鸞聖人の著作には、所々に左訓（ひだりがな）と呼ばれるものが付されており、それは、聖人の文章の意図を知るにはたいへん重要なものである。

例えば『浄土和讃』の「摂取」という言葉には「おさめとる。ひとたひとりてなかくすてぬなり。せふはものゝにくるをおわえとるなり。せふはおさめとる。しゆはむかへとる」と付されている。また、同じく『浄土和讃』の「無生忍」には「ふたいのくらゐとまうすなり。かならすほとけになるへきみとなるなり」と付されている。

これらは聖人自身の言葉の理解を示すものであり、それによってその用語が遣われている文の意図がよく理解できる。親鸞聖人の書かれたものを読み取るには聖人自身がその言葉をどのように理解し、遣っているかを知らねばならない。

このようなことから、左訓を集めた辞典のようなものがあればいいなと常々思ってきた。それで、自分で作ろうと何度か試みて頓挫してきた。

ところが、思いがけず2020年3月から新型コロナウイルス感染症が蔓延（まんえん）し、「巣ごもり」状態を余儀なくされた。それゆえ時間の余裕ができ、勤務の合間にパソコンに向かって用語の収集を始めた。

作業にとりかかったら、これだけでは不十分で、聖人の著作の本文中にある「字」や「語」の注釈や説明も併せて載せれば、もっと便利なものになると思い、字訓・語訓を加えることにした。

コツコツと作業をした。ただ老いのせいか、何時間もパソコンに向かうと眼精疲労で文字が見えにくくなった。一人でやるには気の遠くなる作業だったので、途中「こんなものが役に立つのか」と思い、何度も投げ出したくなった。しかし、これだけは後学のために何とか仕上げたいと励んで2年余でやっと完成し、願いがかなった。

漢字の意味、厳密に

出来上がってみると、やはり便利である。なぜこんな便利なものが、今までなかったのか不思議なくらいである。「一心」を引けば、すべての著作から、全8か所の「一心」についての親鸞聖人自身の解釈が分かる。「一念」を引けば、全6か所の説明が一目で分かる。そして「信の一念・行の一念」の対比ができる。

また、「道路」を引けば、道に「ひろきみち」路に「せはきみち」なり（左訓）」（『高僧和讃』）そして、「道の言は路に対せるなり。道はすなわち、これ本願一実の直道、大般涅槃（ねはん）無上の大道なり。路はすなわちこれ二乗三乗の万行の小路なり（本文）」（『教行信証』・信）とあり、関連する「捷径」には、径に「すくちなり」（『教行信証』・教）とある（本辞典解説：「すぐち」は、まっすぐの意）。関連する用語は文末に「→」で示した。

さらに「堅固」を引けば、「しんのかたきことをけん（堅）といふ。こゝろのかたきことをこ（固）といふ（左訓）」（『浄土和讃』）。「煩悩」は「煩はみをわずらわす。悩はこゝろをなやますという（本文）」（『唯信鈔文意』）とある。また、「歓喜」を引けば、「名号」は、3か所で釈されているが、そのうち❶「慶喜」は、4か所のうち❸に「慶はよろこぶといふ。信心をえてのちによろこぶなり。（略）うべきことをえてのちに、みにもこゝろにもよろこぶこゝろなり（本文）」（『唯信鈔文意』）とあり、また同じ「よろこび」を意味する「歓喜」には、❸に「歓喜といふは、歓は、みをよろこばしむるなり。喜は、こゝろによろこばしむるなり。うべきことをえてむずと、かねてさきよりよろこぶこゝろなり（本文）」（『一念多念文意』）と釈される。つまり、ここでは、信前と信後の「よろこび」の字の遣い分けがなされている。

このように、親鸞聖人は、漢字本来の意味に添いつつ、状況までもわかるように言葉を遣い分けている。

本辞典は『定本親鸞聖人全集』から採録した。ただ、言葉の解釈はその部分だけを切り取ったものであるので、詳しく知るには、本文に当たって、前後の脈絡の中で理解してほしい。そのために、『真宗聖教全書』、『浄土真宗聖典』（原典版・註釈版）（西本願寺本）や『真宗聖典』（東本願寺本）の頁数も併せて載せた。また、左訓はひらがなばかりでしかも古文体で書かれているので、読みやすいように漢字、仮名混じりの現代文を付した。

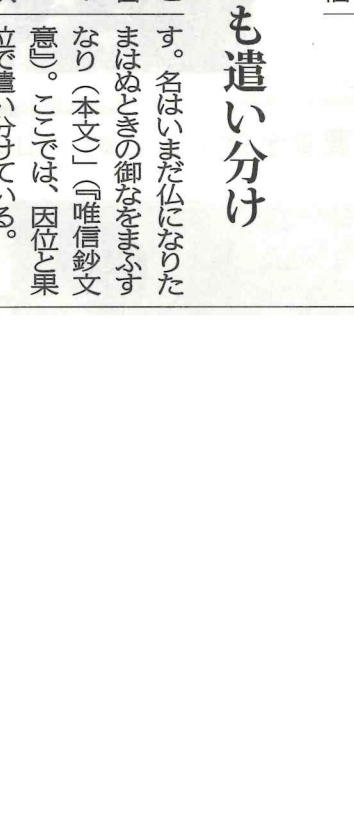
教義上でも遣い分け

次に、教義上ことさらこだわって遣い分けている言葉として、「名号」や「慶喜」・「歓喜」がある。

「名号」は、3か所で釈されているが、そのうち❶「名の字は因位のときのなを名といふ。号の字は果位のときのなを号といふ（本文）」（『正像末和讃』）❷「号は仏になりたまふてのちの御なをまふす。名はいまだ仏になりたまはぬときの御なをまふすなり（本文）」（『唯信鈔文意』）。ここでは、因位と果位で遣い分けている。

「慶喜」は、4か所のうち❸に「慶はよろこぶといふ。信心をえてのちによろこぶなり。（略）うべきことをえてのちに、みにもこゝろにもよろこぶこゝろなり（本文）」（『唯信鈔文意』）とあり、また同じ「よろこび」を意味する「歓喜」には、❸に「歓喜といふは、歓は、みをよろこばしむるなり。喜は、こゝろによろこばしむるなり。うべきことをえてむずと、かねてさ

〈イメージ〉



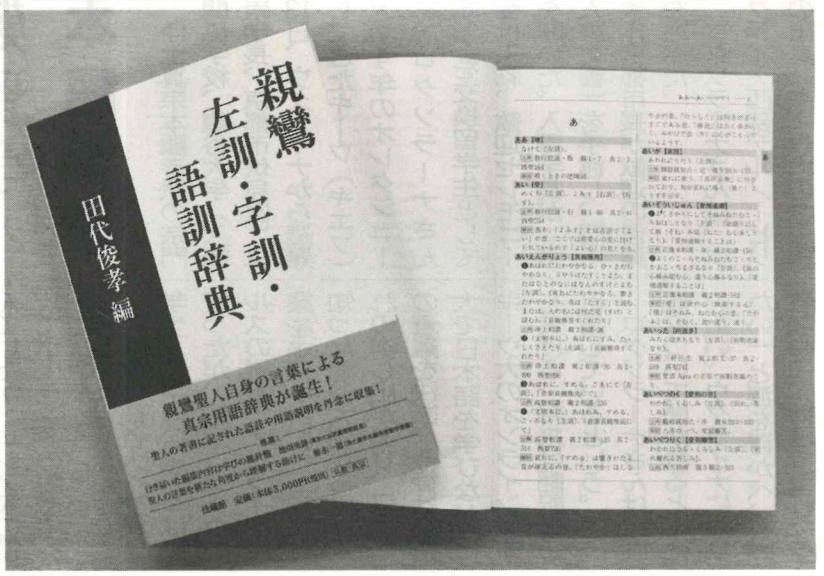
〈内容見本〉

やかの意。「たゝしく」は向きがまっすぐである意。「雅哀」はおくゆかしくみやびで音（声）に心がこもっているようす。

あいが【哀雅】
あわれにうたう〔左訓〕。
出典 親経疏加点・定　親9加(3)-133
解説 哀れに歌う。「鳥声哀雅」に付されており、鳥が哀れに鳴く（歌う）ようすを示す。

あいぞういじゅん【愛憎違順】
❶よくさかりにしてそねみねたむこゝろおほしとなり〔左訓〕。《欲盛りにして嫉（そね）み妬（ねた）む心多しとなり》。「愛憎違順することは」
出典 正像末和讃・草　親2和讃-150
❷よくのこゝろそねみねたむこゝろたかふこゝろまさるなり〔左訓〕。《欲の

親鸞聖人の著書「観経疏加点」（『観経四帖疏』加点本）より



『親鸞　左訓・字訓・語訓辞典』は13日に法藏館から発刊。定価3300円。問い合わせは法藏館（☎075―343―0458）。

真宗学を学ぶ後学の利便性のために、とは言いつつも、筆者自身改めて親鸞聖人の言葉遣いを知ることができ、それぞれの文章を、新鮮に受け止められるようになった。本辞典は、言い換えれば親鸞聖人自身の言葉による真宗用語辞典であり、今までになかったものである。

本辞典の刊行にあたっては、本願寺派勧学寮頭徳永一道師、大谷派真理院院長池田勇諦師など多くの先輩諸先生が、厳密な教義理解に大いに資するものとして、その学術的意義に共感してくださっており、誠に光栄である。

◇